

「碍」の字表記問題再考 (26) 仏教にみる障害者像

「因果応報」の教えを説いた仏教の説話集に『日本国現報善悪靈異記』(以下、『日本靈異記』)がある。弘仁13年(822)頃に撰述されたといわれ、著者は薬師寺の僧侶景戒である。内容は上巻35話、中巻42話、下巻39話の計116話から構成されている。上巻は第21代雄略天皇の時代から奈良時代初期までの説話、中巻は第45代聖武天皇、第46代孝謙天皇、第47代淳仁天皇の3代にわたる奈良時代各地の説話が記されている。下巻は第48代称徳天皇、第49代光仁天皇、そして平安時代初期の第50代桓武天皇の時代を舞台にした説話が書き記されている。

この『日本靈異記』で説かれていることは、善行には善果報があり、悪行にはその報いである悪因果が現われるという「因果応報の理」についてである。

仏教の伝来

『日本靈異記』の「序」の冒頭に仏教の伝来についての記述がある。

諾楽右京薬師寺沙門景戒録

原夫内経外書伝於日本而興代凡有二時皆自百済国将来之輕嶋豊明宮御宇誉田天皇代外書来之磯城嶋金刺宮御宇欽明天皇代内典来也然乃学外之者誦於仏法読内之者軽外典愚癡之類懐於迷執匪信於罪福深智之儔観於内外信恐於因果(簡約)

そもそも遠く外来教学の起源を尋ねてみるに、仏教経典や、仏教の本以外の漢籍が、わが国に伝来して広まるようになった時期は、およそ二度あった。二度とも百済の国から海を渡って伝来したのである。豊明の宮で天下を治められた応神天皇の御代に、仏教以外の書籍、つまり儒教の書などが伝わった。金刺の宮で天下を治められた欽明天皇の御代に仏教の本が渡って来た。しかしながら、儒教の本を学ぶ者は仏法の教えを悪くいった。反対に仏教経典を信じ読む者は儒教などの教えを軽んじている。愚かな人たちは迷いとらわれ、悪の種をまけば悪の報いがあり、善の種をまけば善の報いがくるという原理を信用しない。しかし、知恵の深い仏教信者の仲間は仏教経典や仏教以外の漢籍にも親しんで、因果応報の教えを堅く信じて、つつしみ恐れるのである。

わが国に仏教が入ってきたのは、欽明天皇(第29代)の頃であるが、それ以前に「儒教」が伝来していたと記されている(5世紀始め頃)。わが国の歴史を振り返れば、最初に儒教が伝来し、為政者はその儒教の思想に帰依し、国の仕組みづくりを進め、後に伝来した仏教に深く影響を受けて、律令国家構築への歩みを進めていたことが窺える。

その仏教の受け入れに関しては、儒教信奉者と仏教信奉者の間で激しい諍いがあったことが記されている。さらに、「序」の部分で仏教の重要な教えの一つである「因果応報」を強く信じることを説いている。その因果応報について次のように述べている。

於是諾楽薬師寺沙門景戒熟瞰世人也方好鄙行翹利養貪財物過礙石於拳鉄山以嘘鉄欲他分惜己物甚流頭於粉粟粒以啖糠或貪寺物生積償債或誹法僧現身被災或殉道積行而現得驗或深信修善以生霑祐善惡之報如影随形苦楽之響如谷応音聞之者甫驚

怪忘一草卓之間慚愧之者倏悵惕怠起避之頃匪呈善惡之状何以直於曲執而定是非巨示因果之報何由改於惡心而修善道乎(簡約)

奈良の薬師寺の僧景戒が、つくづくと世間の人々の行いを観察すると、学問・才能がありながら、卑しい行いの者がいる。利益を得ようとつとめて財物をむさぼることは、磁石が鉄の山から鉄を残らず吸い取ってしまうよりもひどいものである。他人の持ち物をほしがり、自分の物を惜しむことは、水車の白で粟の粒をつき砕いて、その実ばかりか、糠までも食いつくすより、もっとひどいといった欲深ぶりである。ある者は、この世で寺の財産をむさぼり取って、後の世に、牛の子と生まれ変わり、前の世での負債をつぐなっている。ある者は、仏法や僧をそして生きながら火難を受けるといった嘆かわしい実状である。

一方、仏道を求め、修行を積んで、この世で善い報いを得ている者がある。あるいは深く仏法を信じ善行を修めて、生きながら福德をうけるといった人もいる。このように、善悪の報いは、影が形について離れないようなものである。苦勞や悦楽が人々の行いに応じて的確に現れることは、それぞれの声が谷のこだまとなって、てきめん返ってくるようなものである。これらの因果の報いを見たり聞いたりする者は、たちまち驚き、不思議がり、同席している人たちの手前もはばからないほどに動転してしまう。罪を恥じる者は、たちまち心が痛み、なんとかそこから逃れ去ろうととまどう。だから善い種をまけば善い結果をえ、悪い種をまけば悪い報いが現れる実例を示さなかったら、何を基準としてまちがった考えや行いを改め、仏法を信ずる道へ導くことができようか。

景戒は、さまざまな人々の姿をみて、人間は、世の中はすべて「因果応報」によって導かれていることを強調している。善きことをすれば善き事が、悪しきことをすればその報いをもたらすということを懇々と説いているのである。

さらに加えて、仏法や僧侶を誹る「謗法罪」を戒めている。『法華経』を誹り、非難する者、あるいは経典を読誦し、写経する者、あるいは保持するのを見て、その者を軽んじて賤しめ、憎みそねんで、長い間怨みをいだく者があるならば、罪にあたる報いを受け、そのような者は、命が終われば、「阿鼻地獄」に陥るであろう。たとえ地獄から出られても、必ず畜生道に墜ちるに違いない。」と強く説いているのである。他者の姿を見て自省し、地獄に墜ちないためには、篤く仏法を敬い、日々実践することを知らしめている。

加えて、「十悪五逆」などの罪を犯すことによって、地獄に墜ち、畜生道に生まれ変わることを再三説いているのである。

日本最古の仏教の説話集である『日本靈異記』の中にも、心身に障害のある人に関する記述が多く散見でき、「因果応報」の教えを展開するための題材となっている。

[引用・参考文献]

- (1) 出雲路修『日本靈異記』岩波書店、1996年、201頁。
- (2) 中田祝夫『日本靈異記(全訳注)』(上)、講談社学術文庫、1978年、26～27頁。
- (3) 同上、30～31頁。